

第2回「文学のまち大津」推進協議会 会議録（要旨）

1 開催日時 令和8年7月17日（金） 15:00～17:00

2 開催場所 大津市役所 別館2階 321会議室

3 出席者 委員 7名

（只友委員、鷺尾委員、七里委員、福井委員、

金子委員、角間委員、福永委員（今村委員代理））

事務局 7名

（木元市民部次長、文化振興課：井上課長、加藤補佐、栗山副参事、

小坂田主任、山本学芸員、井口学芸員）

計画策定支援業務受託業者 3名

傍聴 2名

4 内 容

1) 開会

2) 座長挨拶

3) 「文学のまち大津」ブランディング戦略（骨子案）について

【「文学のまち大津」ブランディング戦略（骨子案）について事務局から説明】

【質疑】

○委員 先ほど説明のあった参画者向け説明会の正式名称は何か。

○事務局 「文学のまち大津」プロジェクト説明会として募集を行い、28名の参加があった。文学のまち大津に関わりたい方や、既に文学に関する活動をされている方、自身の活動を広げたいと考えている方などに参加いただいた。

○委員 文学に焦点を当てるのが他の芸術活動の活性化にもつながるという視点を、戦略でもう少し明確に打ち出せるとよい。例えば、『成瀬は天下を取りにくく』が舞台化されるなど、文学作品が演劇や音楽など他分野へ発展していく事例もあり、文学が文化芸術全体へ波及する力を持っていることを示す例といえる。

○委員 文学が文化芸術活動の基盤となるという考え方や、その価値を発信していく視

点は重要である。ブランディングを進める上でも、そのような方向性を示していくことは大切だと思う。

○委員 市内の書店が減少し、市民が本や文学に触れる機会は少なくなっている。また、文学に関わる活動は行われているものの、一部の人たちの取組にとどまっている面もある。そのため、戦略としては、文学に関わる人や活動の裾野をどのように広げていくかという視点が重要ではないか。

○委員 社会全体として読書習慣やメディアとの関わり方が変化し、出版業界も厳しい状況にある。一方で、文学や本を通じて情報や物語に触れ、それを共有することは、人にとって根源的に重要な営みである。そのような社会状況の変化を踏まえ、文学との関わりをどのように維持・発展させていくかという視点は、本戦略でも重要な課題である。

○委員 若い世代の読書離れと言われることもあるが、本を読む人が大きく減っているわけではなく、本との接し方や購入方法が変化していると考えられる。その一方で、市内の書店は減少しており、その背景にはネット書店の普及や購買行動の変化など、流通環境の変化が大きく影響している。このような状況を踏まえると、市内全域を巡回する「移動書店」のような新たな仕組みも、一つの可能性として考えられるのではないか。

○委員 イベント会場やキッチンカーなど、人が集まる場所と組み合わせて本と出会う機会をつくることも考えられる。本屋には、目的の本だけでなく、思いがけない本との出会いがあることも魅力である。

○委員 本との偶然の出会いを生み出す仕組みは重要である。

○委員 骨子案の「背景」について、歴史的な文学資源が豊富であることと、市民の「ことばの営み」が、それぞれ独立した要素として記載されている印象を受ける。両者のつながりや、市民の「ことばの営み」が天津の歴史や風土の中で育まれてきたものであることが、もう少し伝わる構成にできるとよいのではないか。

○事務局 ご意見を踏まえ、表現について整理・検討したい。

○委員 本文で示されている「歴史・風土を縦糸、ことばの営みを横糸」とする考え方は、天津らしさを表す良い表現だと思う。また、文学に目を向けることが、人間性や心の豊かさを取り戻すことにもつながるという視点は、現代だからこそ

重要なメッセージになるのではないかと。一方で、最後のまとめ方については、「十分に活用されていない」という課題で終わるのではなく、市民が文学を通して、新たな文化を育んでいこうという前向きな呼びかけとなるよう工夫するとよい。

○委員 実行委員会の事業を受託している一般社団法人地域改革は、昨年度から継続して関わっているのか。

○事務局 今年度、新たに実行委員会を立ち上げ、その運営を一般社団法人地域改革に委託している。

○委員 実行委員会での事業計画案「作家への支援」について、現時点でどのような内容を想定しているのか。

○事務局 詳細は今後の検討となるが、現時点では作家に対して一定額の支援を行いながら、出版社等とも連携し、大津を舞台とした作品や聖地巡礼につながるような展開を目指したいと考えている。

○委員 戦略（案）の推進イメージでは、最終段階として「地域プレーヤーによる自主的なプロジェクトの展開」とある。この「自走化」は、どのような姿を想定しているのか。

○事務局 今年度からプレーヤーへの支援を開始し、段階的に活動が広がることで、目安として5年後には地域主体で継続的に事業が展開されることを目標としている。

○委員 その考え方は、継続的な事業展開に向けた仕組みづくりという課題にもつながる。地域プレーヤーが自主的に活動を継続していくためには、どのような仕組みが必要かという視点を、今後さらに整理していくことが重要ではないか。

○事務局 説明会やヒアリングでは、「広報が十分にできない」「活動資金が不足している」といった課題が多く挙げられた。今後は、それぞれの団体がどのような支援を必要としているのかを丁寧に把握しながら、支援策を検討していきたい。

○委員 地域プレーヤーとしては、どのような活動を行っている方が参加されているのか。

○事務局 読書会や本の交換会など、文学や読書に関する活動を行っている団体・個人が参加している。活動に当たっては、参加者が集まりにくいことや、継続的な活動に必要な資金の確保が課題として挙げられていた。

○委員 支援は広報や資金だけではないと思う。例えば、市民が新しい企画に挑戦できるよう助言したり、活動同士をつないだりする役割も重要である。行政の役割は、行政自らが全ての事業を行うことではなく、市民が自ら課題を解決し、新たな活動を生み出せるよう後押しすることである。そのためには、市民活動を活発化させるというについても、今後の検討に当たって参考となる考え方ではないか。

○委員 資料では「強み」と「課題」が的確に整理されているが、「市民の関心が高い」という強みが、課題には十分反映されていないように感じる。関心を持つ人は多いものの、それが活動につながっていないことが課題ではないか。

○委員 現在も様々な活動は行われているが、それぞれが十分につながっていない、あるいは活動を広げたい人が新たな仲間と出会えていないことも課題なのではないか。

○委員 「文学のまち」を進めていく上では、学校教育との連携も重要である。例えば県が「ホールの子」事業を実施しているように、文学についても子どもたちが自然に触れられる機会を設けることができれば、次世代の育成につながるのではないか。

○委員 現在も学校では朝読書は実施されているのか。

○事務局 現在も多くの小中学校で実施されているが、毎日実施している学校もあれば、週に数回など、学校によって実施状況は異なっている。

○委員 以前は朝読書が全国的にも注目され、大津市の取組も評価されていたと記憶している。現在は以前ほど話題に上がることが少なくなった印象を受けるが、読書習慣を身につける取組は引き続き重要であると思う。

○委員 朝読書は全国的に広がった取組である。私が関わっている大学では、「読書マラソン」という取組を行っており、本を読んで感想を書くことで読書習慣を身につける仕組みを設けている。文学のまちを目指すのであれば、学校教育との連携を通じて、子どもの頃から文学に親しむ環境を整えていくことは非常に重要である。

○委員 学校夢づくりプロジェクトの中で、小中学生に文章を書いてもらう機会があるが、学校によって文章力や表現力には大きな差があると感じている。その背景には、読書習慣などの違いも影響しているのではないかと感じている。

4) 意見交換

- 委員 文学資源というと歴史上の作家や作品、史跡などを思い浮かべがちであるが、それだけではない。子どもたちが文学に親しみ、読書や創作を通じて成長できる環境そのものも、大切な「文学資源」と捉えることができるのではないかな。
- 委員 読書は、自分とは異なる人生や価値観に触れ、人としての視野を広げるなど、人生を豊かにするものであり、その意義を改めて発信していくことが重要である。また、市民参加型の読書キャンペーンや、読んだ本の感想を共有できる仕組みなど、市民が読書に親しむきっかけづくりも必要ではないかな。一方で、文学は人と交流しながら楽しむだけでなく、一人で静かに味わうことのできる文化でもあり、そのような個人の楽しみ方も大切にできるような発信が望ましい。
- 委員 文章を書くことはハードルが高いが、本を読んで感じたことを短いコメントとして共有する程度であれば、参加しやすいのではないかな。私自身も読書会に参加しているが、本を通じた交流は非常に魅力的であり、市内でもそのような機会がさらに広がればよいと思う。
- 委員 読書への関心を高める取組として、本の帯を市民や子どもたちが自由に制作する企画も面白いのではないかな。本を読んで、自分なりのおすすめコメントや帯を作成し、図書館で紹介することで、新たな本との出会いにつながると思う。また、図書館や地域において、読書サークルや本を紹介し合う活動などが広がれば、子どもたちの創造性や表現力を育む機会にもなるのではないかな。
- 委員 文学に親しむ人を増やすためには、行政としてどれだけ基盤整備に力を入れるかが重要である。例えば学校司書は、子どもたちと本をつなぐ最前線に立つ存在であり、その教育的な役割は非常に大きい。効果を数値で示すことは難しいが、本を読む力や文学に親しむ力を育てることは、人間形成の基盤となる重要な取組である。文学や芸術に親しむ力は、市民が主体的に社会を支える力にもつながるものであり、そのような視点を踏まえ、学校教育との連携を重視した施策を進めていくことが重要である。
- 委員 図書館だけでなく、支所や公民館に小規模な文庫や本棚を設置し、市民が気軽に本に触れられる環境を整えることも有効ではないかな。また、おすすめコメン

トや手書きの紹介カードなどを添えることで、本との出会いが生まれ、定期的に内容が変わることで楽しみも増えると思う。

○委員 民間施設でも寄贈図書を活用した文庫を設置している例があり、そのような取組も参考になるのではないかな。

○委員 図書館だけでなく、市内に点在する私設図書館なども、市民が文学に親しむための大切な資源である。そうした資源を把握し、データベース化や情報共有を進めることも重要ではないかな。また、ICTを活用して蔵書情報などを共有できる仕組みについても検討の余地がある。市民が日常生活の中で自然に本と出会える環境づくりが、文学に親しむ基盤形成につながると考える。

○委員 ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟を目指すためにも、市民が文学に親しむ環境や基盤整備を着実に進めることが重要である。その積み重ねが、結果として国際的な評価につながるのではないかな。

○委員 ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟自体が目的ではなく、その理念や国際的な水準を踏まえながら、市民の文学活動を支える環境や基盤整備を着実に進め、その取組を市民と共有していくことが重要である。

○委員 大津市では青春21文字のメッセージや本の甲子園など、既に魅力的な取組が数多く実施されている。新たな事業を展開することも重要であるが、こうした既存事業をさらに充実・発展させるとともに、市民へ広く周知していくことで、「文学のまち大津」の取組をより身近に感じてもらえるのではないかな。

○委員 文学への関わり方は、本を書くことだけではない。本について語ることや感想を共有することも立派な関わり方である。また、本が好きでも積極的に自己表現することが苦手な人もいるため、一人ひとりに合った関わり方ができる環境づくりも大切ではないかな。

○委員 学校現場では既に様々な文学に関する取組が行われている。担当教員の異動により、その取組が他校へ広がっていく事例もあり、これまで各学校で積み重ねられてきた実践を把握・共有することも重要ではないかな。

○委員 市外・県外の学校から大津の文学や歴史を学ぶために訪れる事例もあることから、そうした教育旅行等との連携も可能性があると思う。

○委員 文学の拠点という視点では、やはり図書館の役割は大きいと感じる。将来的には、大津らしい特色を持った図書館づくりも視野に入れながら、文学を楽しむ

拠点としての機能を高めていくことが望ましい。また、作家が学校へ出向く取組など、既に実施されている事業を継続・発展させ、子どもたちが文学や作家に触れる機会をさらに充実させることが重要である。

○委員 文学資源については、古典から現代まで幅広く存在しているが、その間に位置する近代文学についても丁寧に位置付けることが重要である。例えば、花登筐をはじめとする大津ゆかりの作家にも改めてスポットを当て、近代の文学資源を積極的に活用していくことが望ましい。

○委員 文学資源については、それらを時代ごとに整理するだけでなく、「今年はこの作家・この作品をテーマにする」といった年間テーマを設定し、市全体で取り組むことも考えられるのではないか。そのテーマに合わせて講座や展示、学校教育などが連動すると、市民の関心も高まりやすいと思う。

○委員 博物館の企画展のように、一定期間テーマを設定して集中的に展開する手法は参考になる。そのような企画を継続的に実施するためには、専門的な知識を持つ学芸員等が中心となり、長期的な視点で事業を企画・運営していく体制も重要になる。

○委員 源氏物語や松尾芭蕉も、大津だけの固有の文学ではない。大津の魅力は、その土地の自然や歴史、風景と文学が深く結び付いている点にある。また、「文学のまち大津」は大津に関係する文学に限定するのではなく、市民が親しみ、愛されている文学も大切にしながら、大津から新たな文学が生まれ、発展していくという視点も重要である。

○委員 大津で暮らしていると、琵琶湖や自然環境は当たり前の存在になっているが、県外から訪れた人は、空の広さや琵琶湖の景観などに強い魅力を感じている。そのような外からの視点を大切にし、大津ならではの魅力を改めて見つめ直すことも重要ではないか。

○委員 文学を楽しむ、人と交流する場としての拠点づくりも重要である。人が集うことで新たな創作や文化が生まれることも期待されるため、図書館をはじめとする交流・創造の拠点の充実が必要である。

○委員 市民が共通のテーマで本を読み、感想や関連する知識を共有する機会を設けることで、文学への関心や理解を深めることができる。また、その取組を通じて、大津の歴史や文化への理解を深め、地域の魅力を次世代へ継承することに

もつながるのではないか。

○委員 「文学のまち大津」の取組は、大津市内だけに視点を限定するのではなく、滋賀県全体の作家や文学資源、文学関係者とのネットワークも視野に入れながら進めることが重要である。そのような広域的な連携が、結果として「文学のまち大津」の魅力や発信力の向上にもつながるのではないか。

○事務局 今後、戦略に基づく具体的な事業を検討していくに当たり、資料に示した取組例が適切かどうか、また、どのような事業展開が望ましいかについてもご意見をいただきたい。

○委員 大学や企業との連携は重要である。特に大学との連携を深め、学生や若い世代が主体的に参加できるような講座やアカデミーのような取組を展開してはどうか。

○委員 文学資源には、大津ゆかりの作家や作品だけではなく、作品の中に大津の風景や情景が描かれているものも含まれる。また、市民一人ひとりの読書体験や思い出も、大津の文学文化を支える大切な要素である。そうした個人の体験や思い出を市民同士で共有できる仕組みがあれば、新たな文学資源の掘り起こしにもつながるのではないか。

○委員 文学散歩のようなフィールドワークについては、地域単位やテーマごとなど様々な切り口が考えられるが、参加者が集まるかどうかはコンテンツの魅力に大きく左右される。そのため、テーマ設定や講師・ガイドの工夫など、内容の充実が重要である。

○委員 目指すべき姿は、市民が大津の文学資源を知り、その価値を理解することで、地域への誇りや愛着を深めることであるとのことだが、さらにその先には、市民自らが地域の魅力を発信し、新たな交流や観光へと広がっていく流れが望ましい。文学や地域について学ぶことで、これまで何気なく見ていた風景やまちの見え方が変わり、それが市民の行動や地域の変化にもつながっていく。そのような学びの積み重ねこそが、文化振興の本質ではないか。

○委員 情報発信については、一方向に情報を届けるだけではなく、SNS等を活用し、市民同士が感想や情報を共有し合えるような交流の場として活用していくことも重要ではないか。

○委員 市民同士がつながり、交流できる仕組みは重要である。そのような視点を戦略

にも取り入れながら、施策を検討してほしい。

○委員 戦略全体を通して、「文学を楽しむ」という視点を、より前面に打ち出してはどうか。文学は学ぶものという印象だけではなく、楽しみながら親しむことが大切であり、そのことが幅広い世代の参加につながると思う。

○委員 「文学を楽しむ」という視点は大変重要である。文学は、読んだり、語ったり、書いたり、人に勧めたり、それぞれが自由な形で楽しめる文化である。市民が「文学を楽しむ」という雰囲気がまち全体に広がれば、学校教育や地域活動にも自然につながっていくのではないか。

○委員 目指す姿についても、「文学に親しむまち」ではなく、「文学を楽しむまち」とすることを検討してはどうか。

○委員 目指す姿を「市民が大津の文学資源に誇りを持ち、生涯にわたって文学を楽しむまち」にする方向はよい。本日いただいた意見を踏まえ、戦略について事務局でさらに整理・検討いただきたい。

5) 閉会